

あとがき

協会会長室には、歴代の会長を見守ってきた阿部泰蔵初代会長の胸像がある。協会発足に至るプロセスは今なお熱くドラマティックである。明治30年1月の営業税法施行に際し、責任準備金を資産の一部として課税するという考えが示され、生保経営上の重大問題と捉え、連合一致の努力を重ねる想いが嚆矢となっている。その努力が実を結び、明治35年には責任準備金は課税対象から外された。また、明治31年には、商法修正案が帝国議会に提出される等個社のみでは律しきれない大きなうねりを感じた業界首脳は、同年5月18日「生命保険談話会」を22社にて発足させ、今なお語り継がれる協会の前身としての極めて重要な組織の誕生を見るに至る。明治38年5月「生命保険会社協会」発足、そして「社団法人生命保険会社協会」となった明治41年12月7日を現協会誕生の日としている。

また、明治41年3月には「保険官営建議案」に反対の大論陣を張り、衆議院委員会にて否決・廃案に追い込んでいる。しかもこの間に協会会館建築の動きも並行させ、その実現に奔走し、大正元年11月、日銀本店、東京駅等数々の名建築を手がけた辰野金吾（工学博士、東京帝国大学工科大学長、建築学会会長等を歴任）氏設計による協会会館の完成を見ることとなる。阿部初代会長を中心に全社一丸となって業界発展の礎を築くため奔走した先人達の努力の姿が当時の写真と共に鮮明な輝きを放っている。

社団法人生命保険会社協会設立より100年史編纂に当たり改めて諸先輩方の業界発展を願う熱い情熱と将来を見通す慧眼に敬意の念を禁じ得ない。

100年の歴史は、序編にある通りであるが、特にこの直近の10年の激動は記憶がすぐにも蘇る程鮮明な事象が多い。いわゆるバブル崩壊による生保会社の相次ぐ破綻と再生、セーフティネットとしての生命保険契約者保護機構の設立、少額短期保険会社の設立、民営化したかんぽ生命の協会加盟、銀行窓販の全面解禁へのステップ、さらには正に100年ぶりの保険法改正。直近の平成20年12月には生命保険料控除制度の抜本的見直し（所得税控除限度額10万円から12万円へのアップ）が与党税制改正大綱に盛り込まれるというトピックス等々枚挙にいとまがない。また、100周年記念事業としての「家族のきずな絵本コンテスト」も成功裡に終わり、次年度以降も続ける方向となった。このように直近10年の流れは、100年を節目に次への大きな胎動を感じずにはいられない。

一方、ここ3年間にわたり保険金等支払い問題に関し、お客さまの信頼を損なう事態を招いたことは再発防止への徹底した不断の取組みはもちろん、業界に働く者全員が真摯に反省し、決して次の世代へ引き継がないと誓うべき事象である。

こうした歴史を記録にとどめ、次の100年に引き継ぐ参考文献にすべく100年史編纂事業は始った。平成18年4月に協会内に百年史編集プロジェクトを発足させ、刊行に向け努力を重ねてきた。協会メンバーは云うに及ばず現会長会社（明治安田生命）をはじめ、直近の会長会社（日本生命、第一生命、住友生命）の調査部門の方々には心からの助言及び意見をいただき深甚の感謝の意を表したい。

平成20年9月のリーマンショックに端を発した米国発の金融危機の震度は世界中の想像を遙かに超える状況を呈し、先行き不透明な時代に突入しグローバルかつスピード感をもった政策対応が望まれている。そんな時代だからこそ、100年に亘り先輩諸氏がそして我々が常に視座に置いてきた「お客さまを守り、お客さまと共に在る」という生保業界の使命を年史の中から読み取り、次の100年への一助となれば幸いである。

平成21年3月

棚瀬 裕明

（百年史編集プロジェクト プロジェクト・リーダー）

百年史編集プロジェクト

プロジェクトリーダー 棚瀬 裕明 理事事務局長（平成18年7月～）

竹之内洋右 理事事務局長（平成18年4月～7月）

委 員 石井 隆 小野恵司 久保田英三 熊田福寿 酒巻宏明 佐野 徹
須田 猛 竹中 肇 椿 雅実 長幡好雄 三井英明 宮崎卓浩
宮崎光明 森田岩男 山下俊章 横井裕之

生命保険協会百年史

平成21年3月発行

編集・発行 社団法人 生命保険協会
東京都千代田区丸の内3丁目4番1号
TEL 03(3286)2727

制作協力 株式会社DNP年史センター

印刷 大日本印刷株式会社
東京都新宿区榎町7番地
